

# 民主化闘争情報

No. 895

2013年11月22日

発行 日本鉄道労働組合連合会  
(JR連合)

月刊誌「文藝春秋」1982年4月号に評論家の屋山太郎氏は「国鉄労使国賊論」を書き、これがマスコミによる国鉄改革キャンペーンの契機となったといわれている。その屋山氏が産経新聞11月21日朝刊・オピニオン面の正論で「JR北は破綻処理するしかない」とJR北海道の問題に関し経営体制及び労使関係のあり方について厳しい論を展開している。

## 屋山太郎氏は今のJR北海道を 「国鉄分割・民営化時と酷似」 「労使とも一新して出直せ」

屋山氏はJR北海道の「歪な労使関係」のみならず、アルコール検知器問題や平和共存否定の象徴でもある結婚式問題など最大労組北鉄労の姿勢に対し厳しく批判している。

・・・JR北海道の事故や不祥事が続発している。乗務員のアルコール検査を昨年まで組合側が拒否していた一事をみても、この会社の異常さが分かる。本社が現場に送ったとされるブレーキ部品について発送記録も現場が受け取った記録もないというのは、信じがたい“無政府状態”だ。・・・今の状態は、国鉄が二進も三進もいかなくなっ、分割・民営化されたときの状況とうり二つである。・・・問題は、革マル系が牛耳る少数派の動労系が巨大勢力になったことだ。・・・国鉄時代は、先鋭的な組合の分会長が会社側の区長を脅して休日を増やすといったヤミ協定が平然と結ばれた。国鉄の経営が破綻したのは、何よりも、組合側に人事権と給与権を握られたことにあっただろう。組合と仲良くしなければ総裁にも労政局長にもなれなかった。私は文藝春秋誌（昭和57年4月号）に「国鉄労使国賊論」と題して一文を書いた。驚いたのは、全国の国鉄職員（組合も当局も）から「その通り！」と激励の声が届いたことだ。・・・函館保線管理室の社員が社内調査に対して「数値を変えた」と述べたとし、「改竄と認めざるを得ない」と表明した。こういう重大事がなぜ見過ごされていたのか。会社側と組合側との間で、「大目に見る」という暗黙の馴れ合いがあったのではないのか。・・・

アルコール検査をしないとか線路検査でインチキするとか、鉄道会社社員である資格などないということだ。・・・新経営陣は前例を破ってでも現状突破を図るものだ。そこに経営を悪化させてきた旧経営陣がなぜ出席するのか。紙に書いていないヤミ協定、労組との暗黙の取引が引き継がれているのではないのか。・・・問題の本質はカネではないだろう。・・・11月21日産経新聞「正論」より

JR連合・北労組は11月17日「JR北海道の信頼回復と再生を目指す」集会を開催し、「JR北海道再生プラン」を公表した。こうした最大労組偏重の歪な労使関係を見直し労働組合の大小に関わらず再生に向けた労使協議行うことが、国民・道民の信頼を取り戻す第一歩だ。

### JR北海道を再生し、国民・道民の信頼を取り戻そう！